

旅客船 関東

東海汽船株式会社

矢田 章（旅客部広報宣伝室長）

少子高齢化・人口減少時代に向けた地域交通事業者の取組事例に関して

1. 少子高齢化時代に向けての現在の状況と課題について

(1) 観光客減少による島嶼地域の現状

弊社が主に運航している伊豆諸島航路では、離島ブームと呼ばれた昭和40～50年代をピークに、年々来島観光客が減少し基幹産業である観光業を中心に島内の産業が冷え込み、島の若者の働き場がなくなっている。その結果として若者が島を出て、過疎化に拍車がかかるのと同時に老年人口の割合が高まり、後継者不足・産業の担い手不足といった悪循環が続いている。また宿泊受入施設の老朽化や廃業、島内アクセスの縮小といった問題も出ている。

観光客の推移

(人)

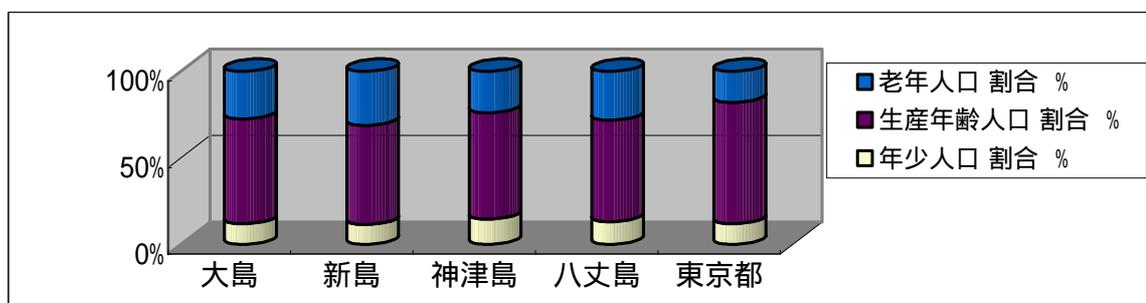
	1973年(ピーク)	1997年	2003年	2005年
大島	831,666	335,087	254,752	216,288
新島	81,169	50,732	49,257	43,706
式根島	42,546	33,044	29,171	23,866
神津島	78,517	52,272	35,739	32,194
三宅島	137,339	78,457	0	29,802
八丈島	195,855	138,936	103,701	80,455

資料：東京都産業労働局「平成17年伊豆諸島観光客入込実態調査報告書」より

注：2003年の三宅島は火山活動の影響による

年齢別人口（2005年）

	人口総数 人	年少人口		生産年齢人口		老年人口	
		(0～14歳) 人	割合 %	(15～64歳) 人	割合 %	(65歳以上) 人	割合 %
大島	9,184	1,093	11.9	5,571	60.7	2,520	27.4
新島	3,164	363	11.5	1,814	57.3	987	31.2
神津島	2,177	318	14.6	1,338	61.5	521	23.9
八丈島	8,989	1,174	13.1	5,279	58.7	2,536	28.2
東京都	12,161,021	1,445,820	11.9	8,539,039	70.2	2,176,162	17.9



資料：東京都総務局「平成17年住民基本台帳による東京都の世帯と人口」

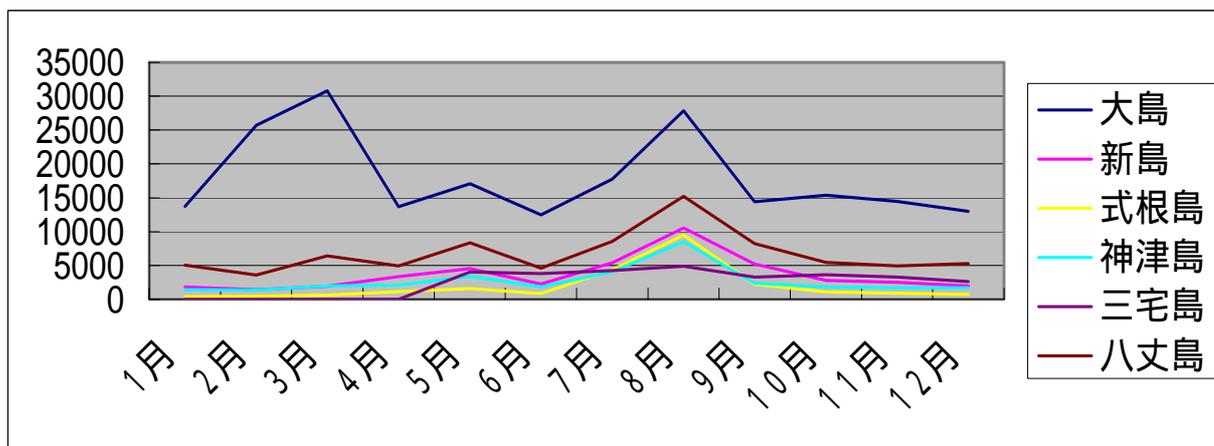
(2) その他の課題

2～3月の樺の大島を除き、伊豆諸島航路は依然として夏季集中型の輸送となっており、年間を通して安定した観光客誘致ができていない。

このため年間を通じて楽しめる、島の魅力作りが必要となる。

月別観光客数(2005年)

(人)



資料：東京都産業労働局「平成17年伊豆諸島観光客入込実態調査報告」より

旅行形態の変化（多様化するニーズ）

旧来の観光中心の旅行から、体験型旅行やペットと泊まれる宿・年配の方や障害を持つお客様にも安心してご利用いただけるアクセスなど、多種多様な対応が求められている。

また団体旅行から個人型の旅行の割合が増えている点から見ても、内容の濃いバラエティーに富んだ対応が必要になる。

情報の提供から、問い合わせ・申込み時の対応、受付時の対応、移動中の船内の快適性、島内でのアクセスおよびその案内、宿泊先のハード面ソフト面、観光地での整備等全ての面でレベルアップしていかなければ客足減少に歯止めはかからない。

そのためには、交通事業者1社だけの力ではなく、地域全体を巻き込んだ形で関係者が一丸となったの改善が必要となる。

2. 弊社の現在の取り組み

(1) 時代に合わせた運航形態の確立

弊社船舶は利用動向に合わせ、大型客船での大量輸送から高速船の導入、全席指定席化など、運航形態および運航航路を常に検討し安定した定期航路の提供に努めている。

- ・ 2001年1月 大型客船2等席の指定席化
- ・ 2001年4月 東京～大島間に高速船アルパトロス就航
- ・ 2002年4月 高速ジェット船セブンアイランド就航（東京～大島、新島、式根島、神津島）
- ・ 2003年7月 稲取航路の休止
- ・ 2005年3月 館山～大島航路の季節運航開始
- ・ 2005年4月 伊東航路の休止
- ・ 2006年2月 館山～大島～下田航路の季節運航開始

(2) 現在実施している具体的取り組み

観光業を中心とした島の活性化を図り、観光客（渡島客）を増やす事が島の交通に携わる交通事業者の大切な役割であり、そのため弊社では現在様々な方策を展開している。

各島行政への活性化に向けた提言

他の観光地の好事例を紹介したりすることで、刺激を与え自覚を促すと同時に互いに協力できる部分を歩み寄り、活性化に向けた方向性を定める。

繁忙期以外での魅力ある商品展開

春・秋の伊豆諸島旅行商品に「東京の島を歩く」というタイトルで、ハイキング・ウォーキングなどを中心にその季節ごとの島の楽しみ方を提案。新聞や旅行雑誌にも広告を出し、各旅行代理店にも同タイトルの商品を展開し、広く告知できるよう働きかけている。

また2007年は、各島から魚介類等の物産提供、施設利用割引等の協力を得て、高速ジェット船就航5周年記念キャンペーンの実施も計画している。

弊社企画旅行商品の充実

往復の乗船券と宿泊のセットというシンプルな商品以外に、オプションで料理や部屋のランクアップや、釣り・ダイビングその他体験プラン、観光タクシーや観光バスプランなど、現地の施設と提携し一括で予約が取れるようにすることで、利用者の利便性の向上や施設の活性化を促している。

ホスピタリティーの向上

予約・問い合わせの電話対応、乗船手続き時の対応、船内での対応など弊社職員は勿論、島での受入施設の対応など、おもてなしの心をさらに醸成して行くべく、お客様からの意見要望などは担当部署以外にも回覧し、場合によっては島（宿など）にもフィードバックし改善を図っている。

インターネットの充実

最新の情報を随時更新。特に運航状況は携帯電話サイトでも案内しており、午前6時には当日の就航欠航が判るようにしている。インターネットでは乗船券の予約だけでなく、宿泊のついたパックプランも予約可能、希望者にはメールマガジンの配信も行っている。

船内設備の整備

新造船を導入してから久しくなるが、既存船の改造や可能な範囲でのバリアフリー化を推進している。船内での過ごし方についても、船によって観光ビデオの放映（高速ジェット船）やシャワールームの設置（大型客船）などを実施している。

3. 今後の方針

現在実施している取り組み事項を今後も継続し、全体的なレベルアップを計っていきたい。島と運命共同体である弊社は来島者を増やすことこそが使命である。海外旅行が身近な物になり、日本全国観光地化されている状況で、昔からの観光地を維持していくのは容易な事ではないが、よくその特性を生かした商品展開をしていきたい。

観光客が島に何を期待しているのか、例えば食事にしてもどこでも食べられるような魚ではなく、島でしか食べられない物、高級魚でなくても新鮮なうちに島民が食べている調理方法で提供する事のほうが旅行者には喜んでいただけると感じる。また、離島という不便な面を補っても余りあるほどの魅力を全面に打ち出し、島側と連携して観光誘致に努めていきたい。ピークの時代に来島した団塊の世代の人たちが余暇を楽しみに、また再び島を訪れてもらえるような商品作りも検討していきたい。

大自然あふれる伊豆七島は、豊富な海の幸・山の幸や歴史文化にも恵まれ、ゆったりと時が流れる雰囲気と、変化に富んだ自然景観等、観光地としての資源は十分に存在している。また、それぞれの島が独特の個性を持ち観光客の好みに応じて選択できるというメリットもある。この各島を都心からダイレクトに結ぶ弊社の役割は非常に重要で、安全輸送を第一に今後の展開を心がけていきたい。